

特集 映像の中の図書館と図書館員

図書館・図書館員が登場する映画 に関する情報源

市村 省二

図書館・図書館員¹⁾が登場する映画(以下、図書館映画²⁾)について紹介した文献やWEBサイトは、国内外を問わず数多く存在する。以下では、日本および海外におけるこの分野の代表的なオンラインおよびオフラインの情報源について紹介することとしたい。また、図書館映画を探索するのに有効な映画データベースについてもふれることにする。

1. 図書館映画のリスト

(1) 単行書

日本では、飯島朋子の一連の著作がよく知られており、同氏による『図書館映画と映画文献』³⁾には631本の図書館映画(個人の書斎や書店などが登場する映画を含む)が題名順にリストアップされている。『映画の中の本屋と図書館』⁴⁾『同 後篇』⁵⁾でも、合わせて400本近い作品(うち、前掲書以降の追加は約80本)がテーマ別に紹介されている。ちなみに、これらの情報源は、後述する図書館映画関連の文献や「図書館映画メーリングリスト」⁶⁾などによっているという。

海外では、筆者の知る限り、仏、伊、米の3ヶ国で図書館映画に関する著作^{7)~9)}が発表されている。Ray TevisとBrenda Tevisの著作は、1917年の“A Wife on Trial”(日本未公開)から1999年の“The Mummy”(邦題名『ハムナプトラ』)に至るまで、主として米英の映画に描かれた図書館員のステレオタイプなイメージを詳細に考察したもので、巻末には、同書で言及した225本の作品と、さまざまな理由から言及しなかった181本の作品が題名順に掲載されている。

(2) 雑誌記事

研究論文からコラム記事に至るまで、図書館映画に関する雑誌記事は数多いが¹⁰⁾、これ

らも、図書館映画の重要な情報源である。

前出の『図書館映画と映画文献』には68本の日本語の関係文献リスト(単行書等を含む)が掲載されている。また、『映画の中の本屋と図書館 後篇』には、15本の日本語の関係文献が抄録付きで紹介されている。さらに、筆者が運営している後述の「図書館映画データベース」¹¹⁾のサイトにも、73本の日本語の関連文献(講演録等を含む。一部は全文へのリンクあり)がリストアップされている。

海外では、前出のTevis & Tevisの著書に、115本の英語の関係文献リスト(単行書やオンライン情報源を含む)が掲載されている。

(3) WEBサイト

日本では、「図書館映画データベース」がよく知られており、日本未公開・劇場未公開のものを含め約900本(うち、コメント付きのものは約300本)の図書館映画がキーワード・ジャンル等から検索可能になっている。

海外では、Martin Raishのリスト¹²⁾がもっとも有名である。米映画を中心に、約550本の図書館映画がジャンル別(「図書館員が明瞭に描かれている」「図書館が描かれているが図書館員は登場しないか重要ではない」「セリフの中にのみ図書館・図書館員が登場する」「未見のため分類不可」)で紹介されている。

Rossana Morrielloによるサイト¹³⁾は、映画、文学、コミックなど文芸の中の図書館・図書館員を扱った総合サイトで、映画の部では、伊映画約70本、伊以外の映画約350本が題名順(伊以外は年代ごとの題名順)に掲載されている。ちなみに、同サイトは、イタリア図書館協会のWEBサイトの一部である。

その他の関連サイトについては、「図書館映画データベース」の「図書館映画関連リンク集」で紹介しているので、参照してほしい。

2. メーリングリスト

日本では、1996年から筆者が運営している「図書館映画メーリングリスト」がある。メ

ンバーの数は 50 名弱+1 ローカルメンバーリストで、新作図書館映画の紹介、最近観た図書館映画の感想、探索ツールの評価、関連文献・サイトの紹介等、図書館映画とその周辺に関する話題について、ユニークな情報交換が行われている。大学・公共・学校等の図書館員や図書館学の教員など幅広い層が参加しているのが特徴である。

海外では、Yahoo! Groups 内に “Librarians in the Movies” というディスカッション・グループ¹⁴⁾がある (2004 年開設。言語は英語)。米映画に見る図書館員のイメージと米国のカルチャー・社会におけるその意味について論じることを目的としており、米国を中心に世界各国から約 300 名が参加している (日本からの参加は筆者 1 名と思われる)。同グループの管理人は、製作中のドキュメンタリー映画、“The Hollywood Librarian: A Look at Librarians through Film”¹⁵⁾の監督・脚本を務める Ann Seidl で、同映画の製作に関連した情報交換が多いようである。

3. 映画データベース

最後に、図書館映画を探索するのに有効な映画データベースについて紹介しておく。

世界最大の映画データベース “The Internet Movie Database”¹⁶⁾は、作品の内容・属性を表すキーワード、略筋、役名、ロケ地等多様な項目から検索することができ、この種の探索には欠かせないツールである。例えば、役名 (男性) に ‘librarian’ と入力すると 200 件近い作品がヒットするが、これらの映画には、何らかのセリフのある男性図書館員が登場すると考えられる。

日本で検索機能が比較的充実しているものとしては、「キネマ旬報全映画作品データベース」¹⁷⁾があり、役名や略筋中の言葉からも検索できる。TV ドラマでは「テレビドラマデータベース」¹⁸⁾が有名で、略筋中の言葉や撮影協力情報からも検索が可能である。

注

1) 日本語の「図書館員」と英語の ‘librarian’ は必ずしも同義ではないが、本稿では、総称して「図書館員」という言葉を使用することにする。

2) 筆者の知る限り、「図書館映画」という言葉が初めて使われたのは、以下の文献である。

市村省二. “図書館・図書館員が登場する映画一覧 Part2”. 書誌調査 1994, 私立大学図書館協会東地区部会研究部書誌調査研究分科会, 1994, p. 12-18.

3) 飯島朋子. 図書館映画と映画文献. 日本図書館刊行会, 2001, 187p.

4) 飯島朋子. 映画の中の本屋と図書館. 日本図書館刊行会, 2004, 162, 17p.

5) 飯島朋子. 映画の中の本屋と図書館 後篇. 日本図書館刊行会, 2006, 222, 21p.

6) <http://www.libcinema.com/libcnml/libcnml.htm>

7) Chaintreau, Ann-Marie ; Lemaître, Renée. *Drôles de bibliothèques...: Le thème de la bibliothèque dans la littérature et le cinéma*. 2e ed., rev. et augm., Paris, Éditions du Cercle de la Librairie, 1993, 415p.

8) D'Alessandro, Dario. *Silenzio in sala! La biblioteca nel cinema*. Roma, Associazione italiana biblioteche, 2001, 224p.

9) Tevis, Ray ; Tevis, Brenda. *The Image of Librarians in Cinema, 1917-1999*. Jefferson, N.C., McFarland, 2005, 230p.

10) 日本では、古くは以下の文献に、『ペンギンズ・メモリー 幸福物語』など 10 作品が紹介されている。本多信喜. 風のたより: [無題]. 図書館問題研究会東京支部ニュース. 1985, no. 196, p. 11.

11) <http://www.libcinema.com/>

12) <http://emp.byui.edu/raishm/films/introduction.html>

13) <http://www.aib.it/aib/clm/clm.htm>

14) http://groups.yahoo.com/group/Librarians_in_the_Movies/

15) <http://www.hollywoodlibrarian.com/>

この映画は、今年 6 月 22 日、ワシントン D.C. で開催される ALA 年次大会でワールドプレミア上映が予定されている。

16) <http://www.imdb.com/>

17) <http://www.walkerplus.com/movie/kinejun/>

18) <http://www.tvdrama-db.com/>

※掲載したデータは、2007 年 4 月末現在のものです。

(いちむら・しょうじ/和光大学情報センター)

ichimura@wako.ac.jp

大学の図書館 Vol.26, No.5, p.62-64(2007.5)
より転載。